湿原に想う

斎藤春雄

野生鳥獣に縁のある仕事をしていると、長い間には、いろいろな土地に足を踏み入れることになる。ことに鳥の場合は、山野はもちろん、海にも島にもすんでいるし、国道の崖に巣穴をつくったり、街なかの土蔵の壁に巣をはりつけて卵を産んでいるものもある。これらはみな違った種類で、いずれも興味深い対象といえる。

彼女らは、どこにでもすんでいるようにみえるが、渡りの季節により、生息状況にいちじるしい変化があるものが多いから、それに合わせて、こちらも動きまわらなければならない。ひとときをはずしてしまえば、もう一年間待たなければお目にかかれぬ鳥も多い。

したがって、かなり無理しても歩かざるを得ないし、くわしく調べようとすれば、引きつづいて同じ場所に、同じ時期に、毎年行くことが必要になる。おかげで、そこにすむ鳥ばかりでなく、生息地の環境とその変化もよく知ることができた。というより、鳥の生息状態は、環境によりいちじるしく変わるものなのだから、まずその地域の自然環境をよく見たうえで、鳥の調査にはいるのが普通なのである。

ところで、街の中や道路筋の場合はべつとして、各地を歩いていると、どういう自然環境の土地が好きということが、おのずと決ってくるらしい。もちろん、そこにすんでいる鳥が興味の深いものであれば、その土地がもっとも気に入った場所であるといえば間違いはないだろう。

しかし、私にとっては、それは研究欲のおう盛だった若い時代のことで、いまではそこにすむ鳥の魅力と、生息地域の好き嫌いとはあまり関係がなくなっている。このことは、年とともに、特定の鳥に対する興味が薄れてきたということなのか、あるいは鳥も大きな自然の中のひとつとしてみることができるようになったのか、それが退歩なのか進歩なのか、自分でも判らないことである。

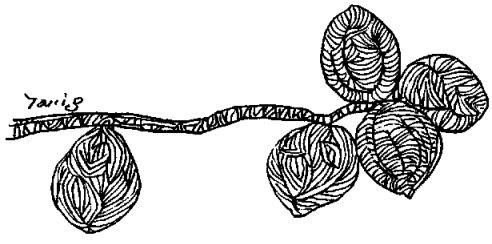
このような見方からいえば、現在、私のもっとも興味と関心をもつ自然環境は湿原である。もっとも、私は若いときから海より山が好きであり、その山より原野のほうに魅力を感じていた。北海道の原野は、多くは湿性泥炭地なのだから、結局は最大の魅力は湿原にあったということになる。

そんなわけで、ヨーロッパを回ったときも、もっとも見たかったのは北欧の湿原で、そのため、国中が湖と湿地でできあがっているようなフィンランドを歩いて、十二分に満足することができた。この国は日本と同じくらいの広さで、人口は北海道くらいと思ったが、それだけに自然もよく保たれているし、土地の人もそれを大いに自慢にしていた。

フィンランドの滞在は、わずか一週間にすぎなかったが、若いころからシベリウスの音楽と白夜で、あこがれに似た親しみを感じていた国だけに、その白夜の、白々とした乳色の明りに浮かぶ湿原の、身ぶるいするほど妖しく美しい姿は、いまでも忘れることができない。

私の世話になった人は、この国でも指折りの地主で、地方の自然保護協会長をしていた。彼は耕地のほかに、森林と大きな沼と、それにつづく広い湿原を持っていた。森林を通る私設林道を車で行くと、各所に鹿を描いた交通標識がたてられて、車と鹿の衝突を防いでいた。公道から分かれて自宅にいたる表道路は森の中につくられているが、そこにすむイタチや小鳥達を驚かせないようにするため、大統領以外の車は乗入れを厳禁しているそうである。ただし、私の車は通してくれたが、これははじめて会った日本人だからであろう。この頑固な自然保護協会長は、また有名な狩猟家でもある。彼は、自分の森には鹿がすんでいるし、沼にはたくさん水鳥が渡ってくるから、秋にはぜひ狩猟にきてほしいと、熱心にすすめられた。

とにかくこの人からは、いろいろな話を



きくことができたが、その中でもっとも印象的であり、深く心をうたれたのは、湿原に対する考え方であった。これは、北欧の他の国できいた言葉と完全に一致していたともいえる。もともと北欧には湿原が多いが、同時に、日本以上に森林や湖をもっている。彼らにとって、湿原だけが自然ではない。

しかし、湿原について持っている彼らの思考は、他の自然に対する場合とかなり違っていた。彼らの話を要約すれば、湿原は自分たちに対して、たとえば森林が木材を、湖が魚をあたえてくれるような生産力は持っていない。わずかに、小さな実をならせてジャムをつくり、果実酒をのむことができるようにしてくれる程度のものであろう。しかし、湿原がわれわれにあたえてくれる恩恵は、まったくこれらとはべつのものである。湿原はわれわれの目に見える何物もあたえぬし、また、われわれからいかなるものも求めない。しかし、そこに湿原があるかぎり、われわれの心は安らかである。それは、母のふところに抱かれている幼児のように——。

このような思想は、苛酷な北欧の風土に堪えて生きつづけてきた彼らでなければ理解できぬところかも知れぬが、なにか私には判るような気もした。かねてより、湿原を前にして立つ私の胸の中に、いつも感じられていた何物かを彼らはいっているような気がしたからである。

三度目でなじみの深くなったコペンハーゲンだったので、裏街にある船員相手らしい小さな酒場にはいることができたが、そこの壁に一枚の航空会社のポスターがはられていた。それには、ごく普通の湿原が描かれていたが、このような場所に、ただ一枚はられている絵が湿原であることが、何かを私に語りかけているようであった。

ヨーロッパを歩いていると、自分たちのもっとも行きたいのは、北欧の湿原であるという人が多かったが、北海道ブームと同様に、夏の北欧は近年とくに賑わっていると聞いている。機械文明にとりかこまれ、身動きもできないような現代社会の中にある欧州諸国の人びとが、最後にもとめるものは湿原なのかも知れない。湿原は山岳の猛々しさもなければ、原生林の重圧感もない。海や湖のもつ冷やかな感触からも遠い。そこにはおおらかな無の世界が広がり見る者の心を暖かくつつんでくれる。欧州の人ならずとも、すべての人は湿原の持つ魅力を素直に感じとることができるだろう。

現在、日本ではようやく湿原に対し、社会的な関心が持たれるようになってきた。しかし、それはこの土地が利用され得るようになり、いわば経済価値が出てきたことと、これにより湿原そのものが消滅してしまうという、相反する二つの事情により、改めて湿原の存在が浮き上がってきたのである。

北欧のように、湿原に対する哲学的ともいえる思考を日本人に求める必要はないが、現実の問題として、新しく展開する経済的価値とその利用を考える前に、湿原の持つ学術的にも精神的にも、さらに特異な景観としても、その貴重性をわれわれはよく認識する必要がある。

湿原は、いまや日本では残り少ない自然のひとつになってしまった。しかも北海道以外の地では、ほとんどその姿を消している。その北海道でさえも、このままで進めば遠からず消滅してしまうことは明らかである。自然はひとたび破壊されれば、それを旧に復することは難しい、といわれているが、湿原の場合は、絶対に不可能であると断言してよい。

自然保護の問題は、社会や産業の開発にともなって発生する矛盾の調整の問題であり、それを適正に処理していくことは各々の立場が違うだけに非常に難しいが、この湿原の問題についても、関係者は、大きな立場でその解決に努力してほしい。

（北海道文化財専門委員）